

残照の街を見下ろす
知られざる日本画家

近藤乾年の「愛宕山画塾」

山ノ手ハイツ

ライト愛宕
駐車場
お車は1万円申し受けます
0233-6322

晴耕雨読 | 建築探訪エッセイ
人がつくる家・家がつくるドラマ vol.8

高橋辰雄(美術家) / 文
text: Tatsuo Takahashi
井上直樹 / 撮影
photograph: Inoue Naoki

愛宕山へと登る道、昔甲府の住人なら住んでいた場所で、いつも辿る道は決まっていたものだ。下町の者なら、まずはガスタンクの踏切りを越すか長禅寺前のガードを潜る。英和学院の裏手からか、葡萄園の間の細い道。今のような大回りした立派な道は、愛宕山子どもの国ができるから。悪戯盛りの子ども達は、富士川小学校裏の無人踏切りを突つ切つて最短コースを登つた。いずれも山石がごろつく急斜面、10分も登れば頂上に至る。私も、わざわざ遠回りして英和の裏手から登ったことがある。家並が切れた中腹に水道局の配水場があつて、ちょっとした空地になつていたからかもしれない。頂上から下つて来たこともあった。桜の咲く頃は人通りも多いが、今では歩いて登る人は少ない。近藤乾年さんの画室があつたのは、その近く。愛宕町に新居を構えたのが昭和24年というから、騒がしい子ども達が山へ向かうのを、きっと迷惑気に見ていていたに違いない。それから、もう数十年の月日が経とうとしている。

縁あつて甲府に居着き、

ここを終焉の地とした日本画家がいた。

近藤乾年は幕末から明治にかけて波瀬万丈の生涯を送った南画家・近藤東來の長男として、明治26年(1893)、大阪江戸堀に生まれた。大阪の大と江戸堀の江を探つてつけた大江が乾年さんの本名。初期の習作には大江のサイン入りのものが多い。流浪する父と居られた時期は稀で、多感な少年期を養母・岸本サトと尾道で過ごした。岸本家は当



大小の遺作が静かに見られる室内。
窓の側まで愛宕山の斜面がせまっている。

地の旧家、その頃は鉛屋を営んでいたという。父も養母も、そのまま後を継いでもらいたいとでも願つたのだろう。13歳になると養母の実家から尾道商業学校に通うようになつた。しかし、まもなく退学。上京して寺崎廣業門下の天籟塾に入つてしまつ。やがて師と縁の深い竹内栖鳳らが教える京都絵画専門学校に入学、次第に頭角を現し、在校中の大正6年の第10回文展に「曇り日」を出品し初入選、翌年には「樂園」が連続入選を果した。

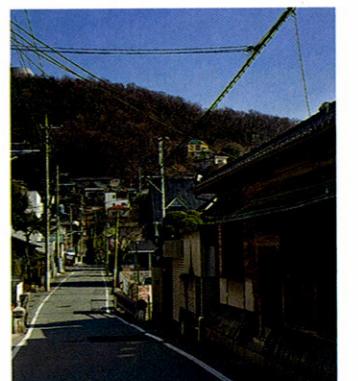
新進の青年画家として注目されるや再び上京して寺崎廣業に師事したが、寺崎はまもなく急死。続いて師事した平福百穂も時悪く病没し、乾年さん自身も帝展無鑑査の資格を得るところを不運にも逸してしまつ。30歳代の意欲的な作品は高く評価されながら、画壇的な保身はどこかちぐはくで上手くはいかなかつた。後年の乾年さんの姿とも重なる。皮肉にももとも充実した作品を残したのは、日本が戦争に突入する昭和10年代。40歳を迎えた乾年さんは、帝展出品作、朝鮮李王家買上げとなつた「凍る鳩」、「鳩」「萌ゆる丘」などの大作を次々と発表。昭和13年(1938)には、川崎小虎、望月春江、穴山勝堂らと日本画院を創設、重要メンバーとして活躍した。

戦時下の昭和19年(1944)、近藤家は東京から山梨

に疎開し、竜王の本妙寺で終戦を迎えた。甲府は、父・近藤東來の所縁の地、その支援者を頼つてのことだったのだろう。ひととき市内二十人町に仮寓した時期もあった。戦争で疲弊し切つた日本にもやがて新たな躍動が始まろうと画壇に入つてしまつ。やがて師と縁の深い竹内栖鳳らが教える京都絵画専門学校に入学、次第に頭角を現し、在校中の大正6年の第10回文展に「曇り日」を出品し初入選、翌年には「樂園」が連続入選を果した。

新進の青年画家として注目されるや再び上京して寺崎廣業に師事したが、寺崎はまもなく急死。続いて師事した平福百穂も時悪く病没し、乾年さん自身も帝展無鑑査の資格を得るところを不運にも逸してしまつ。30歳代の意欲的な作品は高く評価されながら、画壇的な保身はどこかちぐはくで上手くはいかなかつた。後年の乾年さんの姿とも重なる。皮肉にももとも充実した作品を残したのは、日本が戦争に突入する昭和10年代。40歳を迎えた乾年さんは、帝展出品作、朝鮮李王家買上げとなつた「凍る鳩」、「鳩」「萌ゆる丘」などの大作を次々と発表。昭和13年(1938)には、川崎小虎、望月春江、穴山勝堂らと日本画院を創設、重要メンバーとして活躍した。

戦時下の昭和19年(1944)、近藤家は東京から山梨



久々に訪れた坂のある道。
庭には懐かしい伴助の白い花が待っていた。



変わらぬ佇まいの庭の木々にも季節が巡ってきた。きっと守る人がいてのことだろう。



近藤乾年の戦前の秀作「浜働き」 ふだんは室内にあるが久々に山梨県立美術館で公開された。

とある蕎麦や饅頭の店先に、また心あるコレクターの手元に幾多の心温まる作品が残ることになった。

昭和58年(1983)、生前で唯一の個展が山梨県立美術館で開かれた時も、愛宕山画塾の生徒や県内の支援者が協力した。多くが市井に住む普通の人々である。知友の日本画家・奥村土牛が初めてその事実に驚き、思ひぬ話題となつた。お亡くなりになつたばかりの昭和61年(1986)に開かれた白根桃源美術館で開かれた遺作展「幻の巨匠・近藤乾年日本画展」は、まさに県内コレクター手持ちの逸品と乾年さん自身が寄贈された作品を中心とした、思い出深い展示となつた。今も続いている「乾年会」は、その時分のお弟子さんや長年の後援者が中心になつている。

もうお分かりだと思う。近藤乾年の絶頂期の大作は、大半は現在失われている。後に長女の小穴笑子さんが住む東京鷺宮の旧宅から発見された作品は、幸いにも修復され何点かは県立美術館に収蔵されているが。残された数少ない作品から、その生涯と未完の作品に想いを巡らすしかなのだ。



いつも眺めている甲府の街。
やや高台のここが一番落ちつける場所だと言う。



近藤乾年、タケ夫妻は二人の娘さんを育てられた。戦前に

富士が見える所に美人はいないからか、生まれ故郷の尾道に似ていたからか。

平成になつて、老朽が激しくなつた旧宅の改築が進められる前後、さそわれて画室を訪れる变成了った。北山野辺の散策ルートに近い山裾。設計を任せられた建築家の久保田要さんと、初めて坂道を登つていった時の記憶が鮮やかに残っている。主人のない画室で鳥獸を描いた古い写生帳を見せていただき、その鋭い筆致に驚嘆したのが始まりだった。まだ夫人の近藤タケさんが元気でおられ、その後話を聞きた。また夫人の近藤タケさんが元気でおられ、その後話を聞くに何度も訪れるようになった。戦後間もない物資の乏しい頃の建築、けつして豪華な造りではなかつたが、部屋の併まいや家の物腰に庭木のひとつにも、下町の民家にはない何とも言えない風情が漂つていた。乾年さんが幼年期を過ごしても忘れられなかつた。山に開まれた甲府なのに、確かに違つて見える。駅裏にはどこか郷愁をさうぞうらぶれた氣分が漂つていたものだが、今や高層マンションが建ち、視線を遮るほどに再開発が進んでいる。久々に訪れると変わらぬ静けさ、あの頃よりずいぶん高くなつた侘助が咲き、紅梅がもう膨らみかけていた。

近藤乾年、タケ夫妻は二人の娘さんを育てられた。戦前に

東京で生まれた長女の笑子さんと戦後になつて甲府で生まれた二女のとし子さん。残された有形無形の遺産が、これまでお二人の手で大切に守り続けられてきた。遺作展の開催や美術館への収蔵に「乾年会」の催しにいつも奔走していたのは、東京在住の笑子さんだつた。戦中、戦後の一番苦しかつた時代に少女期を過ごされた笑子さんは、家内の様子もしばし鋭敏に感じられたかも知れない。白根桃源美術館に所蔵されている「笑子」は、いつまでも心に残る小品として私の記憶に残つてゐる。庭で鎌を持ちながら鋭い視線を向けている、いささかドラマチックな場面に見えなくもない。長女は、家を離れることで、父の遺産の意味を問い合わせてゐる。そんな姿勢が、もうこの姿から始まつてゐるように思えてならない。まだタケ夫人がお元気な頃、同館の遺作展に展示された後、寄贈されたものどうかがつた。

平成9年(1997)晩秋に、旧画室は住居と展示スペースを兼ねた二階建てに改築された。貴重な遺品と所蔵の大中小の作品も一部展示されるようになつた。久保田さんの絶妙なデザインで画室は再生され、愛宕山斜面の自然や庭木をそのままにあべき処に見事に収まつた。今住まわれているいまだタケ夫人がお元気な頃、同館の遺作展に展示された後、寄贈されたものどうかがつた。

平成9年(1997)晩秋に、旧画室は住居と展示スペースを兼ねた二階建てに改築された。貴重な遺品と所蔵の大中小の作品も一部展示されるようになつた。久保田さんの絶妙なデザインで画室は再生され、愛宕山斜面の自然や庭木をそのままにあべき処に見事に収まつた。今住まわれているいまだタケ夫人がお元気な頃、同館の遺作展に展示された後、寄贈されたものどうかがつた。

今年になって開催された、山梨県立美術館の記念展「山梨に眠る秘蔵の日本美術」では、東来さんの晩年の大作「那智瀑布図」、乾年さんの昭和初期の秀作「浜働き」がともに見られた。まずは東来さんが甲府にたどり着いたことが、物語の始まりとなつた。今はお一人とも、市内光澤寺の近藤家の墓に眠つてゐる。

今年になって開催された、山梨県立美術館の記念展「山梨に眠る秘蔵の日本美術」では、東来さんの晩年の大作「那智瀑布図」、乾年さんの昭和初期の秀作「浜働き」がともに見られた。まずは東来さんが甲府にたどり着いたことが、物語の始まりとなつた。今はお一人とも、市内光澤寺の近藤家の墓に眠つてゐる。

今年になって開催された、山梨県立美術館の記念展「山梨に眠る秘蔵の日本美術」では、東来さんの晩年の大作「那智瀑布図」、乾年さんの昭和初期の秀作「浜働き」がともに見られた。まずは東来さんが甲府にたどり着いたことが、物語の始まりとなつた。今はお一人とも、市内光澤寺の近藤家の墓に眠つてゐる。

今年になって開催された、山梨県立美術館の記念展「山梨に眠る秘蔵の日本美術」では、東来さんの晩年の大作「那智瀑布図」、乾年さんの昭和初期の秀作「浜働き」がともに見られた。まずは東来さんが甲府にたどり着いたことが、物語の始まりとなつた。今はお一人とも、市内光澤寺の近藤家の墓に眠つてゐる。

やはり西陽射す夕暮れがいい。
人々に愛されながら甲府に没した
日本画家・近藤乾年の画室が
愛宕山に抱かれて佇む、なだらかな坂の上。
遠くの山並み、足下に聴こえる街のざわめき。
父も母も見ただろう風景を眺めながら
ひつそり、旧宅を守る続ける人がいた。

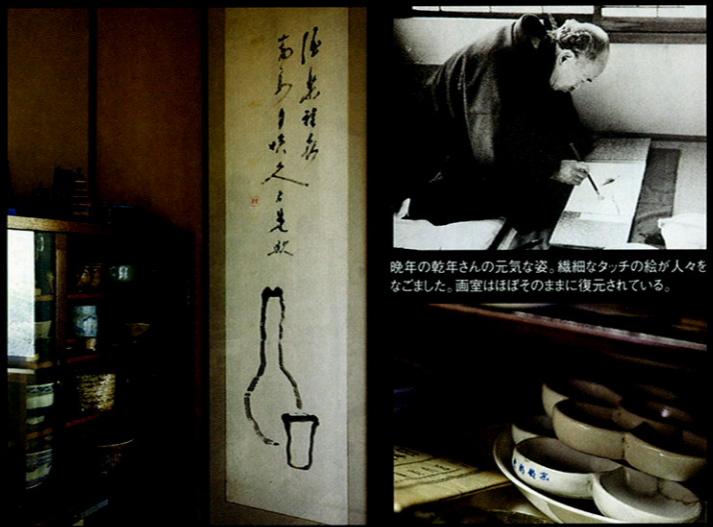


旧宅の趣をそのまま残す画室。目に触れる鳥獸草木は乾年さんの絵の重要なテーマとなった。



旧宅の当時から、そのまま掲げられている「古里」の篇額。

・場 所 山梨県甲府市愛宕町381
・設 計 不明(改築ケビーチ久保田一級建築事務所)
・竣 工 昭和24年(改築平成9年12月)
・構造様式 平屋木造2階建てに増改築
・用 途 再生された画室&展示空間兼用住居



高尚な趣味を思い出しさせる数々の遺品。



乾年さんも見ていた画室からの庭の眺め。



生活空間とのつなぎの回廊には小品が飾られる。

*参考資料
「近藤乾年画集」(近藤タケ・三好忠、「茶の間の美術展」(深澤周平・美香延)、「知らざる鬼才(大刀)」
「書森成吉・春喜」、「ふるいぬぼー臨時増刊」の画家・近藤乾年、「岩島正吾」「山梨ふるいの文庫」、
「日本画狂の季節」(田中佐夫・美術公論社)、「天下人を取める給」(田中佐夫・山梨日新聞記事)
H-1-5(国税・山梨県の税務の日本美術)「山梨県立美術館」「らんぐり連載」「山の邊残照」(高
橋辰雄・奈良余美文庫)
*取材は、現地の「近藤とよまき」、今後の姿になるまで改築・再建に心を尽した久保田